

新しい学び方を身につけよう

理事 明石 要一

日本が抱える三つの課題

今、日本は三つの課題を抱えています。一つは人生一〇〇年時代を迎えています。現在一〇〇歳以上の人は何万人いると思いますか。七万人に近いのです。千葉県銚子の人口六万三千人より多いのです。小学校五年生は、半数近くの人が百歳まで生きる、といわれます。人生一〇〇年時代が到来すれば、学び方が変わります。学校教育への依存が極端に減ります。八十年以上が独自の学びをしなければなりません。

二つ目の課題はSociety 5.0の到来です。狩猟時代、農耕時代、産業時代、情報時代、そしてICTI (Information and Communication Technology) を中心としたグローバルな時代に突入

します。簡単にいえば、AIと競争するのではなく共存するにはどういう力を身につけなければならぬか、です。

三つ目の課題は、人口減少時代の到来です。学校の統廃合が進み、閉鎖される大学が増えてきます。「村を捨てての学力」から「村を育てる教育」への大転換が迫られてきます。人づくり、つながりづくり、まちづくりが課題になります。

認知能力より非認知能力が求められる

認知能力は教えられます。知識・技能、そして思考力、判断力、表現力などの学力の三要素といわれるものです。これらは主に学校教育で身につけます。一方、非認知能力は感性や直感的なものです。これは教えることが難しいのです。学校では無理です。放課後の遊びのなかで身につけます。「能力」と「才能」の違いと似ています。能力は身につけます。だから、教えることができます。学校がその役目を果たしています。一方、才能は教えることはできません。潜在的に備えているものを引き出してあげるのです。また、才能を伸ばすのです。

才能は引き出し、伸ばすのです。だから、場数を増やしチャンスを与えなければなりません。人と人との関わりが大切になります。出会いの時期が重んじられます。ここから、「ゴールデン・エイジ」という言葉が生まれてくるのです。芸事やスポーツはいつ始めればよいか、

が問題になります。例えば、プロサッカー選手になるには小学校三、四年生から始めるとよいといわれます。中学校から始めるとノンプロでは通用するがプロでは難しい、といわれるのです。これが、才能でいわれる「ゴールデン・エイジ」なのです。別な言葉で言えば、才能教育は「習うより慣れろ」となります。

判断力と決断力の違いは何か

今の子供たちは、判断力は身についているが、決断力が乏しい、といわれます。自分で決めきれないのです。「どうすればよい、今してもよい、どちらかに決めてほしい」という指示待ち人間になっています。

学校は判断力を教えます。しかし、決断力は教えることができません。決断力は遊びや生活の場で育てられるのです。学校教育の優等生は東大生であり、高級官僚です。彼らは問題解決のために様々な情報を集め、解決策のシミュレーションを作り出し、A案、B案、C案を提示します。頭を使い、判断をし、うまくプランを練り上げます。一方、決断力の優等生は政治家です。提示された三つの案から一つを選ぶのです。賛否両論があるなか、最後は一人でどちらかを選ぶのです。

大学生には次のように説明します。「恋愛」は判断力です。お互いのことをよく知るために

情報を集めます。長男か、一人娘か、趣味は何かにこだわります。「結婚」は清水の舞台に立ち、片目をつむり「えい、やあ」といつて飛び降りるのです。人事を尽くして天命を待つ心境です。この結婚の決断は、親でも教師でも教えることは不可能です。

「教育」の二つの意味

教育の字にこだわりたいです。「教」はまさにおしえるのです。それに対して、「育」はそだてるのです。認知能力や判断力、そして能力は教えることができます。非認知能力や決断力、そして才能は教えることは難しいのです。前者のチャンピオンはAIです。判断力は優れずに答えを出してくれます。ところが、AIの弱点は「問い」を作れないことです。問われた問題にはすぐさま答えを出します。しかし、疑問や問題意識を持つことはできないのです。人生一〇〇年時代、AIは力をいっそう発揮します。認知能力ではAIと競争しても勝てません。AIと共存するしかないのです。その近道が問題を見つけ出し、問いを作ることなのです。これからの学びは引き出す、伸ばす、育つ「問い」づくりなのです。

あかし・よういち

千葉敬愛短期大学学長、文部科学省中央教育審議会委員、千葉県地域訓練協議会委員、公益財団法人育てる会理事。専攻分野は教育社会学、青少年文化論。